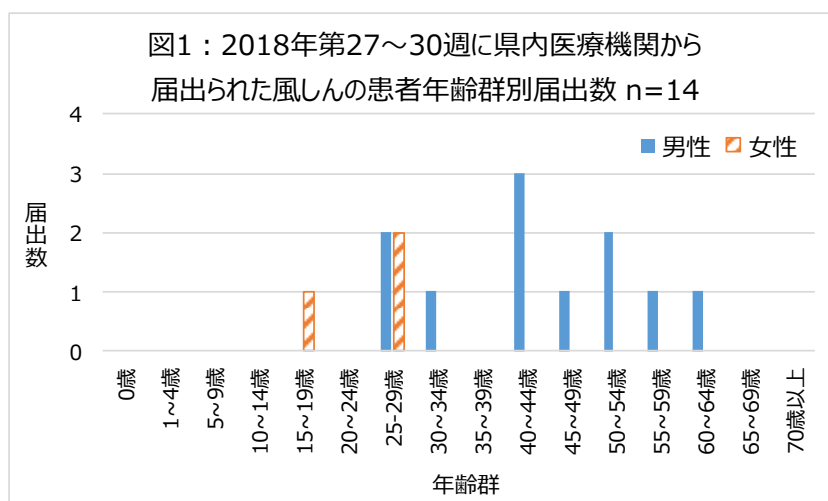


【今週の注目疾患】

【風しん】

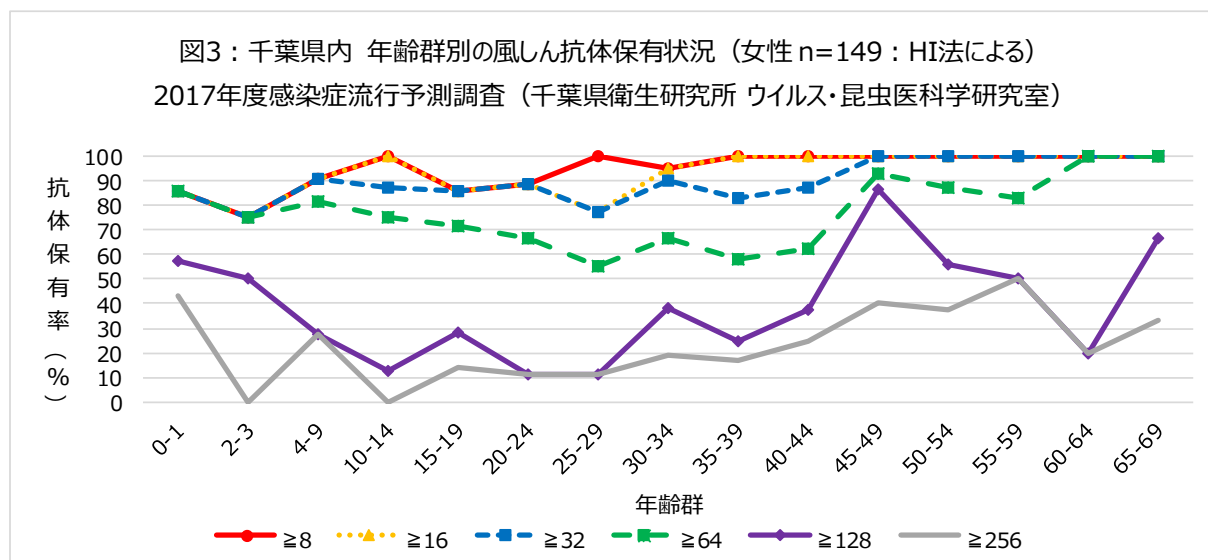
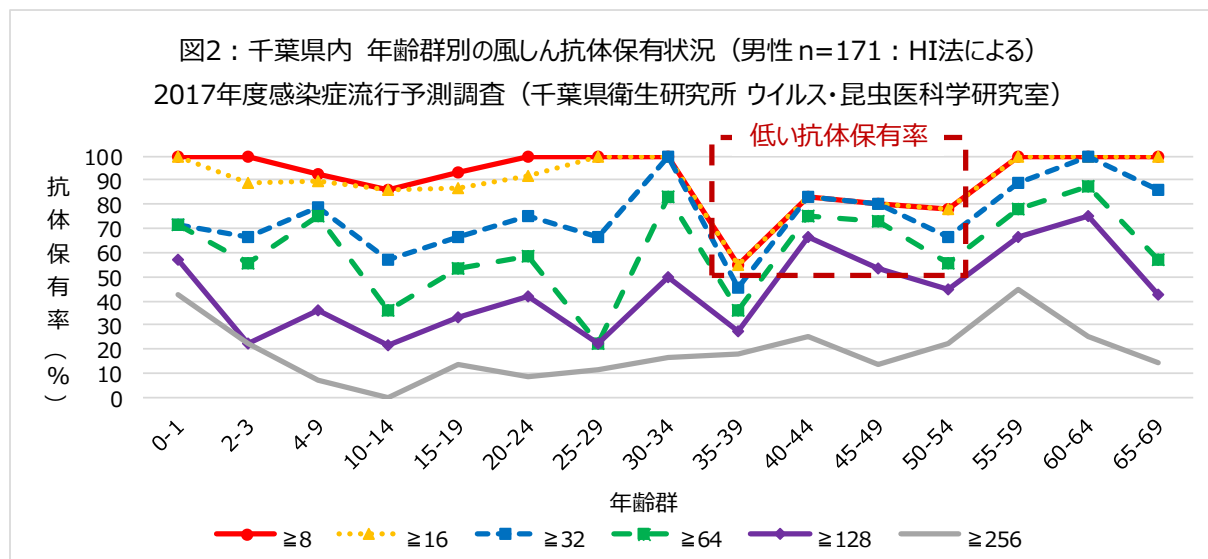
2018年第30週に県内医療機関から11例の風しんの届出があった。第27週以降風しんの届出が続いており、県内での風しんの流行が危惧される。第27～30週に合わせて14例の届出（第1～30週の累計は17例）を認め、14例の内訳は男性が11例と多く、患者年齢は女性が10～20代、男性は20～60代の届出であった（図1）。ワクチン接種歴は1例が1回有り、13例はワクチン接種歴不明であった。



風しんは飛沫感染や接触感染により拡がり、潜伏期間は2～3週間と長い。症状は発疹、発熱、リンパ節腫脹（特に頸部、後頭部、耳介後部）を主とし、発疹出現1週間前から発疹出現後1週間程度の期間、ウイルスを排出する。感染しても症状が出ない不顕性感染の人が15～30%程度いるが、不顕性感染でもウイルスの排出を認め、感染源となりうる。

風しんは2012～2013年にかけて全国で大きな流行があり、また、これにより妊婦そして胎児が感染して「先天性風しん症候群」の発生も報告された。先天性風しん症候群とは風しんウイルスの胎内感染によって先天異常を起こす感染症であり、妊娠20週頃までに免疫のない妊婦が風しんに罹患するとウイルスが胎児に感染し、出生児に先天性心疾患、難聴や白内障といった障がい引き起こされることがある。県内でも2012年に113例、2013年に711例の風しんの届出があり、2013年と2014年に1例ずつ先天性風しん症候群の届出を認めた。

風しんの予防には2回の風しん含有ワクチンの接種が最も有効である。県内における風しん抗体保有状況の結果（図2、3）、35～54歳の男性の4人に1人は赤血球凝集抑制（HI）法で測定した抗体価において抗体価〔8倍未満〕と風しんウイルスに対する免疫を保有していなかった。なお、1979年4月2日以前の生まれの男性においては、定期接種として風しん含有ワクチンを接種する機会がなかった。妊娠を希望する女性やその同居者、医療従事者などは、より確実な風しんの予防のため、十分な免疫を保有していると考えられる〔32倍以上：HI法〕の抗体価が求められる。2017年度の調査において、県内では20～30代女性において抗体価32倍未満の割合は20代（16.7%）、30代（12.1%）、男性においては20代（28.6%）、30代（35.3%）であった。



妊娠を希望する女性やその家族においては、ワクチン接種歴を確認し、未接種の場合は抗体価の測定やワクチン追加接種といった対策が勧められる。なお、妊婦はワクチンを接種することはできない。また、接種後の2ヵ月間は避妊が必要となる。

引用・参考

国立感染症研究所 風疹とは

<https://www.niid.go.jp/niid/ja/kansennohanashi/430-rubella-intro.html>